

大東ふれんぼ帳

(22)

どこかで

「春」が生まれてる

陽気地中に萌(きざ)しがねが、東の間ではあつたが、自然が織りなす見事な演出である。

今年、このほか寒波の居座りが長く、新聞紙上に「スキー場だより」と、「梅だより」が隣り合わせの枠組に載せられている。

陽気が地上に昇り、雪氷解けて雨水となり、草木春陽に誘われて枝葉萌(も)える、と土御門(つちみかど) 曆の伝える雨水の日、如月(きさらぎ)十九日に近く、積雪三層を超える春の淡雪を見た。

飯盛の連山は白いベールに包まれ、さながら飯(い)を盛りたるがごとしと古人が、山容をたたえた様相を降りしきる白銀(しろ)

を交える豊かな自然。我が住む町から少し足をのびただけで、澄んだ空気が、清らかな小川のせせら

どこかで「春」が生まれてる。どこかで水がながれ出す。

ぎ、市内で失われつつある緑が豊かに息づいている。そこに生きる小鳥や昆虫の世界、子供のころ親しんだ素朴な自然が目前に広がる。

どこかで雲雀(ひばり)が啼(な)いている。どこかで芽の出る音がする。山の三月、東風吹いてどこかで「春」が生まれてる。



今、市内の北新町で遺跡の発掘調査が急ピッチで進められている。現代、近世、中世より古墳時代へと地表が地層ごとに「カキ取られ」てゆく。出土した遺物類についてはさておき、中世のころの水田に残された人と牛の足跡を見ると、なぜか「どこかで春」の歌謡が脳裏をよぎる。ことに、「山の三月東風吹いて……」は、ここで農耕にいそしんだ先住者の春を待つ心に思いをはせる。「ヒバリ」が啼くのどかな田園風景にかぶさり蔽(おほ)い寒さの中に春をまつ農耕民の姿である。

文・今村安和